

3. 免疫状態下で作製した実験的肉芽組織の性状に及ぼす加齢の影響について

--- 画像解析を中心に ---

(病理学第一) 西川純子、鳥海昌喜、綿鍋維男、鈴木晟幹、李 毓灵、嶋田裕之

若齢ラットでは、老齢ラットに比べ免疫状態下では肉芽組織細胞は増殖性で活性化されていることを報告した。今回は、活性化細胞の同定とその性状を明らかにするために画像解析による検討を行った。【材料と方法】BSAを吸着させたK-アラムを若齢(8週齢、Y群)及び老齢(18ヶ月齢、O群)ラットfoot padに皮内注射、同時に背部皮内にcellulose spongeによる異物型肉芽組織を作製した。感作21日目に肉芽組織を採取しSAB法による免疫染色、ACASによる画像解析を行った。【結果】Y群感作群ではPCNA、TNF陽性細胞が多数認められ、これらは二重染色によりマクロファージであることがわかった。O群感作群では異物型巨細胞は小型化、PCNA陽性細胞は著減した。しかし、細胞性FNはO群で強陽性となり、O群感作群では巨細胞体内にも強陽性となった。以上より、マクロファージの免疫学的感受性は老化により著しく低下し、このためextracellular matrixの形成も何らかの影響を受けていることが示唆された。

4. 尋常性白斑患者血清中sIL-2Rレベルと病型、病勢との関連

(皮膚科学) 本多 芳英、大久保ゆかり、古賀 道之

血清中sIL-2Rレベルはリンパ球活性化の指標とされ、各種感染症、自己免疫疾患、臓器移植後等で上昇することが観察されている。今回自己免疫機序の関与が想定されている尋常性白斑で、その病型や病勢との関連を検討した。

材料：皮膚分節一致性のB型白斑患者12例、不一致性のA型白斑のうち進行期患者17例、鎮静期患者9例、正常人対照者12例の静脈血より血清を分離して用いた。

方法：Boehringer Mannheim社のh-Interleukin-2 receptor ELISAキットを使用した。

成績：B型白斑では対照群と差がなかったが、A型白斑進行期群では対照群および鎮静期群に対して、有意にsIL-2Rの上昇がみられた。

結論：A型白斑進行期には、体内で免疫機構が活性化されていることが推測される。

5. 小麦粉アレルギーにおけるHLA-DPBの関与について

(内科学第三) 松村 康広、丸岡 教隆、玉木 利和、清水 園子、小林 真人、久保 隆之、露口 都子、福田 俊明、山本 忍、対馬 裕典、新妻 知行、林 徹、伊藤 久雄

小麦粉アレルギーの症例においてそのHLAとの関連を検討した。

<対象と方法>製パン、製菓業従事者で小麦粉特異IgE抗体陽性者15名についてSerological HLA typingを行った。さらにHLA class II allelesのGenotypingを10例で行い、正常日本人の頻度と比較検討した。

<結果>HLA-Aw33(w19), B44(12), Bw67の頻度が、小麦粉RAST陽性者で正常コントロール群と比較して有意に多く認められたが、DR, DQには有意差は認められなかった。HLA class II AllelesのGenotypingでは、DQB1*0604, DQB1*0303が有意に増加していた。有意差は認められなかったが、DPB1*0401, DQB1*0602, DRB1*1302, DRB1*1502, DRB1*0602も高頻度傾向であり、MHCクラスII分子のアトピー性疾患へ果たす役割の重要性が示唆された。

6

肺高血圧を呈したPSSの一例

(内科学第一) 堀江 忍、内海健太、鳥居泰志、米丸亮、峰村和成、春日郁馬、清川 浩、水野耕介、金井恵美子、楠本 洋、平嶺陽子、市瀬裕一、外山圭助
症例：56才男性。主訴：手指の冷感。現病歴：S62年より主訴出現しPSSと診断され通院中。平成3年に労作時の息切れ増悪し同年10月本院入院。入院時現症：全身の皮膚硬化、口唇、爪床に「7-7」^{*}、心音は肺高血圧を示唆し、両下肺野に捻髪音を認めた。入院時検査所見：T-Bil 1.45, CRP 1.9, ANA 160倍, PaO₂ 59.4, %VC 65.1%, FEV_{1.0%} 84.2%, P_{mean} 36, 胸部レ線上下両肺野に線維性変化、左4弓の突出、CTR66%, 心エコーにてTR, PR, 右心房、右心室の拡張、心嚢液貯留を認めた。肺動脈造影にて肺動脈の閉塞像、陰影欠損像を認めず。PSS, 肺線維症、肺高血圧と診断し加療したが平成4年9月に右心不全にて死亡。病理所見で肺動脈内腔の狭窄、高度右心肥大を認め、血管炎の所見を認めず。本邦で病理所見と対応して報告された例が少なく貴重な例と考えられたため報告した。